

色彩環境論 (8)

景観形成と色彩施策

— 金沢都市美文化賞の20年／1978-1997 —

山 岸 政 雄

はじめに

色彩学の重鎮であったアメリカのCheskin.L. (1900-1960) 著、「役立つ色彩」(1949)で、色彩が住まい方の記として大切な情報であることを知ってから半世紀が過ぎた。そして今年の "AIC Color 97 Kyoto" (国際色彩学会・京都97)で斯界の研究者J.=P.ランクロ氏による色彩地理学の提唱や、色彩環境の分野で30件に及ぶ研究発表がなされたことなど多くの事例に接するなかで、色彩が自然や社会を理解する繋ぎ情報として如何に大切であることを承知すべき時代到来の感を強くした。本研究もこのような時期と機を一にして歩んできた調査対象の検証と軌跡である。

ところで表題とした景観問題については、色彩が個性的な表現情報としても尊ばれることもあって、評価しにくく賛否を巡る論が蛇行してきた。このような状況にあってもさらなる気に掛かる景観要因は都市の色彩である。

今日の都市景観は日々建てつくられる住宅や業務ビル、商業関連施設、学校、ホール、橋などの公共の建造物、さらには広告サイン、看板といった色彩表情に頼る空間で埋め尽くされていると言っても過言ではない。日本の都市にあっても初めての経験となったこのような色彩情報に、市民はどう付き合ってきたのであろうか。そこで好事例である金沢都市美文化賞20年の足跡を知見し、歴史的遺産を抱える都市金沢再生の手法と問題解決の糸口を探りたい。

なお記述は、本賞の創設以来今日まで委員の末席にあって溜置いた資料を底盤としている。

[1] 金沢都市美文化賞

・目的：この賞の創設は1973年頃からはじまった言はゆる騒色問題が、500年に及ぶ加賀百万石の城下町金沢を直撃しはじめた危機感を、民間組織がフォローしたところにその契機があった。構成母体は、金沢商工会議所、金沢経済同友会、金沢青年会議所で、1978年(昭和53年)に第1回の推奨物件11件を褒賞した。推奨の意義について「伝統美あふれる詩情豊かな都市環境を守り育てていくこと…」や「良き金沢の町並み」にそぐわないものが現れてきたことに大きな危機感を抱いた…」と当初から委員長であった福光博氏(金沢経済同友会代表幹事)は記している。本賞がシビルモラリティに支えられたものであることが分かる。ちなみに当時の金沢市の人口は約41万人、世帯数は13万4千であった。

・対象物件：公募制度とし公共施設、商業ビル、住宅等、その他(公園緑地、プロムナード、広告サイン)の本賞と、小さな景観作法と形容される「気配り賞」の分野毎に選考審査を行う。1978年から1997年まで過去20年間の応募総数は1,709件で受賞総数は228件、内訳は公共施設等50件、商業ビル等82件、住宅等55件、その他14件、気配り賞27件である。毎年およそ100件の審査を行い、10件前後を表彰してきた。なお対象物件は過去3年以内に金沢市内で新築、増改築、改修された建造物を2か月の期間内で募集をし、所定のカラー写真(キャビネ版大)を添えて応募または推薦を受けたものである。

・審査方法と基準：前記の民間3団体と金沢市、石川県、学識経験者によって構成された『金沢都市美委員会』(約20人)が当たる。小委員会に於ける専門審査などの推薦、推奨、選抜の後、最終選考の対

象物件は全て現地視察を行い、可能な限り選定誤差の消去に努め認定される。評価項目は次の通り。①色彩②形態③周辺の緑化計画④周辺地域への配慮である。

発表：毎年11月中旬頃に施主、設計、工事施工者を招き一堂に会し表彰する。受賞理由を明記したカラー印刷の受賞カタログを作成し、公開の記念講演も開催し、市民への啓蒙活動も積極的に行ってきた。なお本賞はこの20周年をもってさらなる発展を期し、下記のような運営の改正を行った。主催は前記の民間団体による市民賞であることに変わりはない。

- 1) 名称：「第20回+1回、金沢都市美文化賞」とし以下毎年公募する。
- 2) 委員会：金沢美文化賞実行委員会とする。
- 3) 市民審査の導入：金沢都市美文化賞候補作品市民審査パネル展を開催する。実行小委員会による現地審査を通過した25点を市内2カ所に展示し、一番良いとおもはれる作品に投票してもらう。結果は審査の参考とする。
- 4) 事務局を金沢市役所（まちなみ対策課）に置く。

[2] 受賞物件の色彩考察

・調査対象と資料：1978年-1997年の受賞物件228件に関する受賞カタログの写真印刷物及び現地調査。

・調査分析方法：印刷物、カラー写真から色差計にてL*a*b*表色系（CIE.1976）及びMunsell表色系（HVC）による直読計測。

・日時と観察者：1997年11月-1998年2月/於、金沢美術工芸大学色彩研究室にて当該研究者。

・分析結果（別図表1978-1997参照）

①茶系色の微妙な繰り返し：20年間の表色空間には、流れながら少しずつ交互する茶系色の変化が確認された。そこには金沢らしい色彩を期待するパラダイムがある。

②新素材色との対峙：ガラスやラスタール光沢鋼材など時代ごとの新しい素材による色感に対しては、望まれる伝統色との間で違和感のない限り推奨の対象となっている。伝統は変化によってこそ継承される

との善説が生かされている。

③景観色は生きている：経済成長や個人所得の変化は都市環境を変えるが、ここ数年の明るくて粉っぽいパウダーカラーから、強い透明色への移行にも本賞は伝統美の蘇りを期待し対応していることが計測値から読める。

④伝統色の強靱さ：使われた色彩をさらに細かく見比べると、金沢の建物の色使いは、九谷五彩に象徴される赤、黄、緑、藍、紫と時には金襴彩の豪華な色調や、加賀友禅染に見る縹縹彩色の繰り返しの調色技法が潜在的に支援色となり、またアクセントカラーとなって見え隠れしていることが分かる。施主にも設計施工する側にも、かなりのレベルでこのような風土文化の呼吸をもって望んでいることが推察される。

⑤金沢の市街地の望ましい色調との関係：当該研究者は、既報 "Colrs of the historical city of Kanazawa Japan" (AIC 1977 Toroy New York USA) における色彩調査を浮標に金沢の色彩研究を進めているが、本件のデータにも主格色である黒、利久茶、鶯茶、朽葉、焦茶、利久ねず、山鳩、錆納戸、藍ねずみ、赤褐色が見られいまだ一線は崩れていないことも追認できた。

⑥現象色との対話効果：金沢は山紫水明の地で四季折々の豊かな表面色はもとより空間色、面色、鏡面色、光源色となる夜景など、日常の対話色が大変多い街である。したがって推薦され、褒賞された物件は現地審査においてさらなる効果色を演じていることがままたり知見手法とした現地視察を評価しておきたい。

⑦経年の是認点、問題点。

1978 (S.53)

茶系色一辺倒の時代

1979 (S.54)

公共建築が盛んに建てられるなかで、ポストモダンへの指向と伝統景観との擦り合わせが選考の論点となった。また黒い屋根瓦で象徴される甍の波がオレンジや青いスパニッシュ瓦によって寸断されることに景観変貌の危機感を抱き始めた時期でもある。

さらに住宅の新築ブームが到来し、金沢らしさを謳う在来工法とパネル工法による住宅建設が競り合い、ことに後者の工法で用いられたサイジング壁は参入景観として認知をされ今日に至っている。主に肌理（テクスチャー）と色彩についての金沢らしさとの整合性の良否であった。このことは1998年の今日、質量共に景観形成の主格にさえなっている。

1980 (S.55)

一方この期で注目されたのは石川県婦人会館のレンガ色にみられたような本物志向である。またいくらかでもゆとりとプライベートな自由を求め、メゾネット方式の住宅も盛んに作られた。そこでは色彩もアクセントとして積極的に使われている。貴重な都市空間の有効利用が景観や色彩補完に役立った例は浄水場屋面の運動施設併用である。そこでは人工緑地が造成されあきらかな補完効果があることで受賞した。あるいはまたしばしばイベントによって街にディスプレイ空間が見られ仮りの色彩の楽しさのあることも知り得た。

1981 (S.56)

金沢のシンボルカラーである茶系色の認識に微妙な変化が起きた。それは濃いめのチョコレート色で日本名色はもぐらいろ（4YR3/10）の周辺である。この背景には都市化による環境用具、例えば電話ボックス、ガードレール、バス停、ベンチ、ごみ箱、公共サイン、街路灯などがこの地方の緑樹の幹の色と概ね共色となることから市街地調和色として多用されるようになった。同じことは全国各地で試行されその色はセピアゾーンを一杯によぎっている。例えば新潟市は砂色系であり東京の中心部は幾らかみどりを含んだローアンバーが指向されていた。またクリーム色（4Y8/10）も同えて都市全体の明度が上る兆しが出て来た。このことは15年後の今日現実となった。

1982 (S.57)

前年からの色彩変化は次にベージュ色を誘い、柔らかくて明るい住宅や公共建造物が次々に建てられた。また市街地の修景、修復も盛んとなりそのため原風景の色彩論議が多く交わされることとなった。

この年受賞した料亭「ふじとし」は、建築基準法の防火基準と金沢の誇る東山地区の伝統的町並み保存の木造再生の狭間で揺れた。その結果内壁の防火基準達成をもって了とする特例処置で町並みと色彩が保全された。

1983 (S.58)

景観における色彩が近接要因を抜きにできないことは周知の保全概念である。この年の金沢市役所の受賞は、建物がかなり濃いめのレンガタイル（5YR6/12）故に調和論の論議がつくされたが、周辺緑樹の生長を景観ストックに換算して決まった。ここではそうなるであろうとの予後の景観評価のあることを学んでいる。この年はまたエメラルドやマリーーン、ホワイトが街の色として多く見られ落ち着きを旨とする金沢らしさと感情的な拮抗を覚えた市民もいた。

1984 (S.59)

いわゆる日本経済のバブル前期にあたり色彩は多彩になり建築、建造物もまたあらゆる形式が月日を惜しむがごとく建設された。また環境調整では鳥瞰、俯瞰景観に関心が集まることとなった。理由はレジジャーとしての展望施設が相次いでつくられたことと、建築、建造における高さ制限や景観遮蔽、色彩影響などのさまざまな景観様相も、遠景や鳥瞰展望を妨げない限り可と出来るとの緩和スケールに使われたことなどである。

1985 (S.60)

ガソリンスタンドと自動販売機の色彩の景観に及ぼす影響が全国的に見据えられることとなった。そのような折り本賞を受賞したガソリンスタンドの色彩は、黒と茶色の金沢の伝統色に徹した物件で高い評価を得た。また金沢市の西部新市域に展開した産業振興ゾーンも調和の取れた美的環境が推奨の対象となった。ここでは一連の大型公共建築がベージュ色に統一されている。

1986 (S.61)

日々株価が高値更新されるバブル経済のなかで、例えばリゾート地の直接開発のような、いまだ経験のない景観輸出などに浮足立っていた。しかしなが

ら一周遅れのトップランナーを自認する金沢は、建物の色彩にも灰桜色（RP7 8/6）のような低彩度でいくらか明るい色彩を選ぶことが流行と言った、落ち着いた環境づくりが静々と行われていたことも特記しておかねばならない。

1987 (S.62)

本賞10周年に当たるこの年は記念として「全国都市美フォーラム'87」を開催し経過を顧みると共に運動の趣意を全国に向け発信し協調をも求めた。この都市には固有で美しい価値のあることを祝い誓いとした。ちなみに招待講演は山崎正和（哲学、演劇作家）、岩井彦二（建設省技術審議官）、田村明（法政大学教授）、石井幹子（照明デザイナー）の各氏であった。いずれも都市の色について所感を述べられた。

1988 (S.63)

都市の景観環境を支える事物は建物や樹木、河川のみならず、信号灯や駐車標識、停留所、電話ボックス、時計、ポケットパーク、カスケード、曲水など多くがある。それらには知られざる知恵や気配りがなされ癒しの空間を担保していることが間々ある。これらの事象もまた推奨に値するものとして「気配り賞」が設定された。例えば外国人の訪れることの多い金沢ゆえに設けられた6ヶ国語（英、韓、中、日、仏、露）の市街案内ボードもその一つで後の1992年に受賞した。色彩ではガラスを多用した建築が数多くなり鏡面色を伝統環境との摩り合わせのなかでどのように位置づけるかについて考察された。固定化した結論はもたなかったが、文化現象としてその場に相応しいか否かを解釈し対応することとなった。

1989 (H.元)

この年の受賞色彩は10年程以前に受け入れられた濃い茶色であるもぐら色が一層多く、金沢の景観基底色として固定化した感じを持った。しかし一方では京都の基底色と言われる「聚楽色」(6YR7/10)が目立ちはじめ、伝統色のなかの棲みわけ論が交わされた。今日でも聚楽色と金沢らしさをめぐり論じられる事が多い。

1990 (H.2)

快適な環境価値が本格的に求められるようになって来たこの期は、周辺に配慮した余裕のある住宅建築がモデルとされた。また建物の凹凸によって発する積極的な光の文化景観も良とされた。しかし一方においては守るべき景観として黒い葺の保全が再確認され、公共施設にも出来る限り施工されることとなった。さらには画一的な駅前景観が全国的に議論される中であって、JR金沢駅前の航空会社経営の大型ホテルの色彩に柔らかな灰桜色が取り入れられ、その協調性に好感が持たれた。

1991 (H.3)

この年は坂道や寺院の門、中心市街地の変電所など気配り景観に優れた物件が多く、都市美文化賞が細部に浸透し始めたものと関係者は安堵した。

1992 (H.4)

色彩と形の交響が始まった年である。色彩については新築から修繕修復まで、木色（もくじき）と言はれる白っぽい茶色から濃い茶色まで、使い勝手にそって交互に配色されている。また軽快な形態使用によって色彩使用の明度がかなり上がって来た。このことは否応無く明るくなった今日の街の色の先駆け現象である。また斎場建築とその環境整備もこの年の受賞となり注目された。

1993 (H.5)

さらなる気配り賞の多い年となった。遊歩道や坂道、古い町並みの界限整備が対象となった。またJR金沢駅周辺の総ガラス張りの現代的なビルや、景観の一体感を愛でている大きな旧家もその保全の良さをもって褒められた。何よりも施主が都市美に対して積極的理解を持つようになったことは特筆されて良い。本賞創設の効果でもあろうか。

1994 (H.6)

本賞が創設された20年前、金沢市内におよそ5,000棟の木造住宅が建て替え予備軍として推計されていた。顧り見るに、以来進められてきた新築改築はこの20年間で街の様相を確実に一変させた。色彩においても、黄色や紫、青く濃い色彩の住宅がちらほら見え隠れするようになった。このようなスト

ロングカラーの市街参入は金沢にとって未知の景観である。それぞれの色使いが自走を始めたようである。また黒い甍の連なる金沢でも普及したコロニアルスタイルの屋根も同じである。さらにはガーデニングに象徴される西欧の緑樹空間の入り込みは、伝統都市金沢の脈絡を変える兆しかもしれない。

この都市の吉報はJR金沢駅前の大型ホテル群を主格とした色彩整合が完了したことであろう。レンガ色や灰桜色からベージュまでほぼ色調の揃ったビル群の修景には四半世紀、25年の歳月が費やされた。行政も民間施主も市民もまさに我慢のひとであったと思う。先にも述べた全国画一的な駅前修景は金沢がひとつの答えを出したと言ってよい。

1995 (H.7)

前年につづいて早いピッチで伝統都市の有様が変貌している。例えば屋根の形もカマボコ型やむっくり屋根が表れそれなりの評価を得ることなどである。色彩においても景観条例の色彩勧告を不思議に思う他意無き世代も多くなっている。このことは文化の変容でもあるが伝統都市保全の責任論として論議して置かねばならないだろう。

1996 (H.8)

都市の顔はそこに住まいするひとの状態を映していることと、外部からの思い入れも映される。この年の受賞には後者の代表作が加わり色彩共々称賛された。また一方、この期における新築、改善住宅の色調が以外によく揃っていることも知見できた。

1997 (H.9)

20年の節目を迎えた本賞の色彩は、ベーシックカラーとアソートカラー（支援色）とアクセントカラーの使い方が一定水準に終始していることにおいて優れて重量級である。過去20年で経験をしてきた問題点も、これから先長い都市の歴史のなかで収斂して行くものと確信をした。

[3] 色彩施策

本推奨制度の色彩分析から確認出来たこと。

①長年月にわたる褒賞制度によるデータの蓄積の有

効性と経験則の施策への反映と応用効果。

②色彩情報が理解され、楽しめる学習の機会を多く持てるような支援制度の必要性。

③美しいまちづくりと色彩調和は市民のプライドであることを都市形成の目標として掲げる。

④伝統都市の直面する色彩保全への繋ぎ情報として不可欠な顕賞制度であることが証された。

⑤より一層の研鑽を期待して、世界各国の類似都市との比較研究を望みたい。

おわりに

冒頭にも提起したように都市問題と美的環境の関係は、もしもその自治体や市民が無関心を装った場合確実に都市は瓦解する。そのスケールにおいてその複雑さにおいて事象の把握と解析統合、そして規範の確立はまさに都市間競争の要となっている。

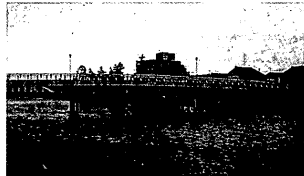
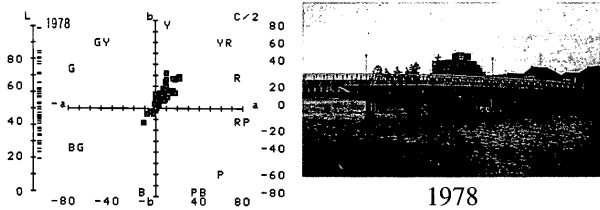
1998年秋、別途この問題の解明にも関連して訪ねたイギリス南西部のリゾート都市ボーンマス（Bournemouth）と、中部バーミンガムの衛星都市コベントリー（Coventry）でも気迫のこもった攻防を知見した。ことにアーバンフリンジ（Urban Fringe）と言われる市域の拡張に伴う隣接利害の調整は、景観施策において最も苦慮し英知を結集する都市問題であった。その中であって色彩環境も例外でなく多くの適用外事例に対処する自治体職員の姿が印象的であった。つづいて出席したオスロ国際色彩会議'98（Oslo International Colour Conference98 "Colour between Art and Science"）でも、会議のテーマを検証するレクチャーのなかで、北緯78度のノルウエーの鉾山町 "Longyearbyen"の生活の色彩と質を問う発表などは、この難題に関連しての解を求めたものであった。

以上見て来たように本調査では、来る世紀に向けて金沢がどのような都市格をめざすかの推進要因として、平衡感覚に支えられた市民活動がより一層活発に行われねばならない事が証された。

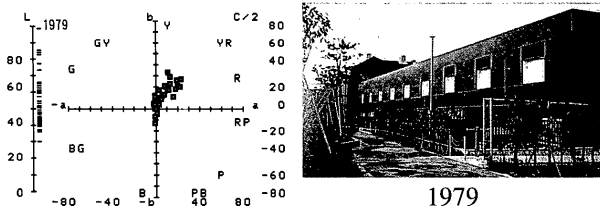
なお、あらためて金沢商工会議所、金沢経済同友会、金沢青年会議所にお礼を申し上げたい。

金沢都市美文化賞各年度受賞例一覧

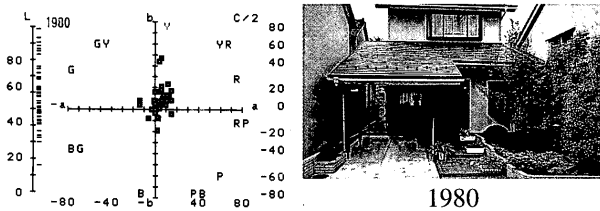
- 1978 梅の橋
- 1979 金沢市立図書館
- 1980 清水 忠邸
- 1981 都市用水環境整備 (辰巳用水その1工事)
- 1982 料亭藤とし



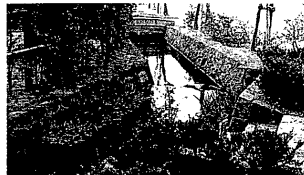
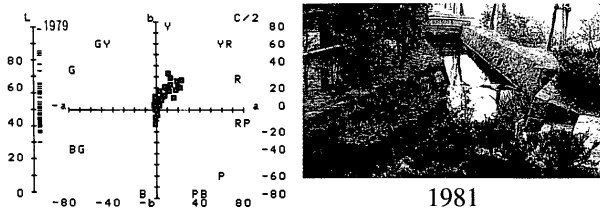
1978



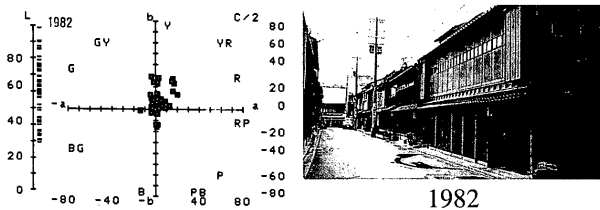
1979



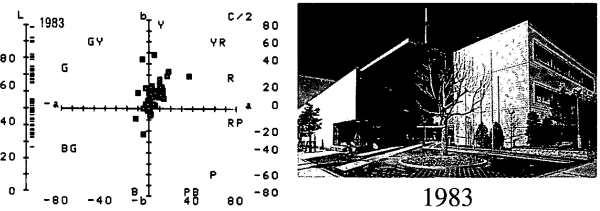
1980



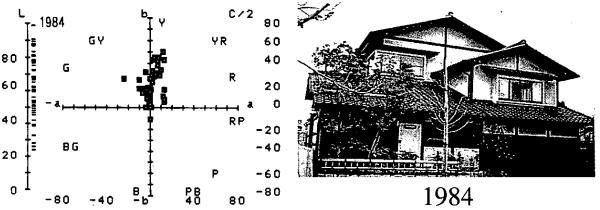
1981



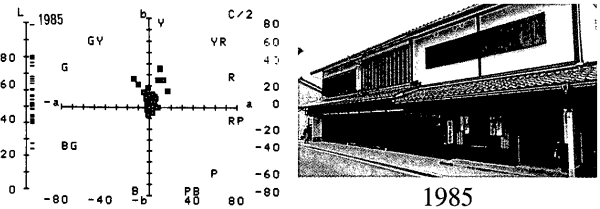
1982



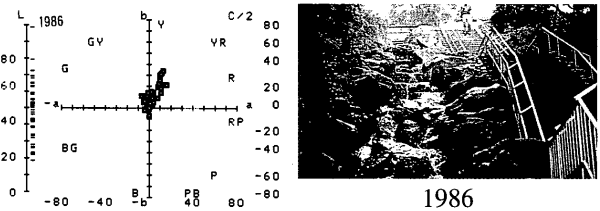
1983



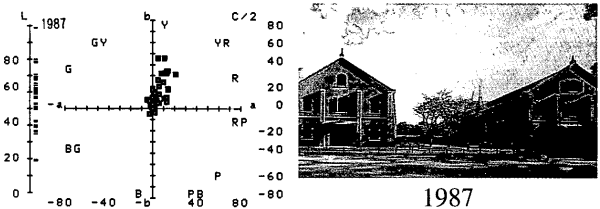
1984



1985



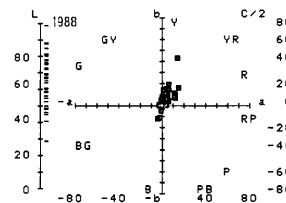

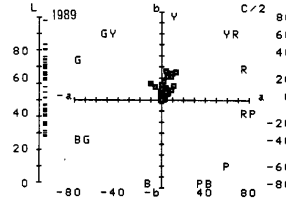

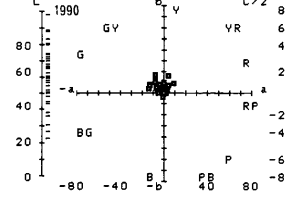
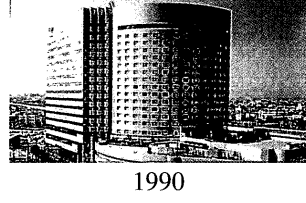
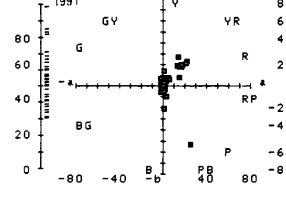
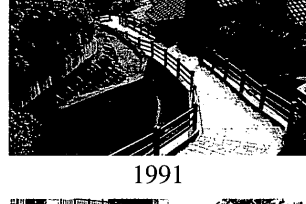
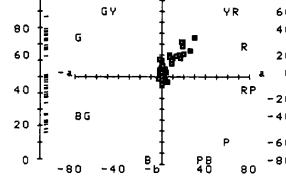

1986

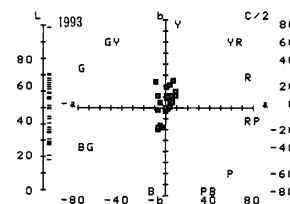
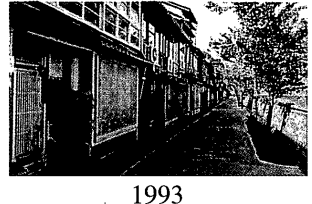
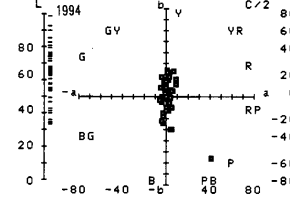

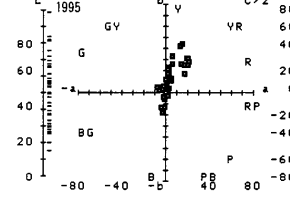
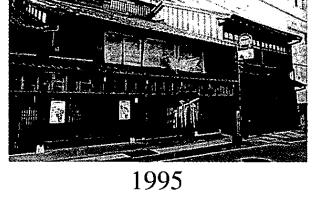
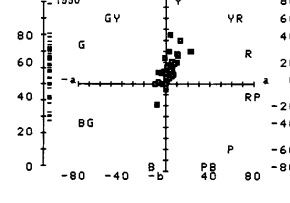
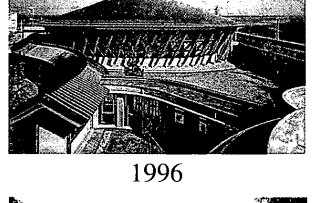
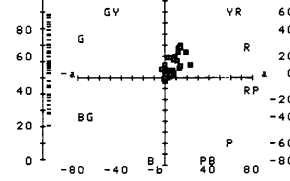
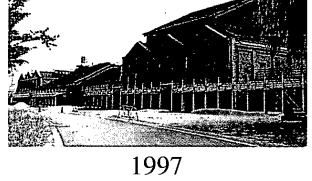


1987

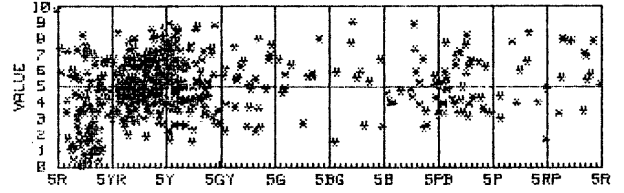
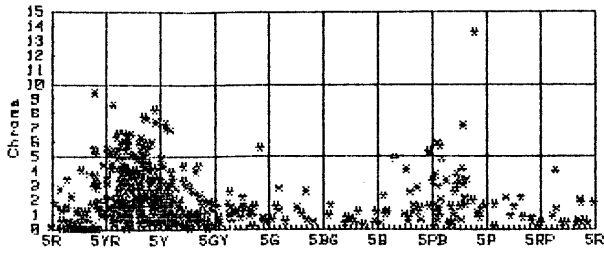
- 1983 金沢市文化ホール
- 1984 松本勝男邸
- 1985 酒井商店
- 1986 石川県立美術館から金沢市立中村美術館に通じる歩道とその周辺
- 1987 石川県立歴史博物館

- 1988 長町街路修景工事
- 1989 浅野川大橋
- 1990 ヴィサージュ (全日空ホテル)
- 1991 嫁坂修景整備工事
- 1992 金沢6ヶ国語観光案内板

 <p>1988</p>	 <p>1988</p>
 <p>1989</p>	 <p>1989</p>
 <p>1990</p>	 <p>1990</p>
 <p>1991</p>	 <p>1991</p>
 <p>1992</p>	 <p>1992</p>

 <p>1993</p>	 <p>1993</p>
 <p>1994</p>	 <p>1994</p>
 <p>1995</p>	 <p>1995</p>
 <p>1996</p>	 <p>1996</p>
 <p>1997</p>	 <p>1997</p>

- 1993 旧主計町界限修景整備
- 1994 長町武家屋敷界限の庭園曲水
- 1995 料亭寿屋
- 1996 石川県金沢港大野からくり記念館
- 1997 金沢市民芸術村



金沢都市美文化賞の色分布 (1978-1997)

(やまぎし・まさお 色彩学)

(平成10年10月30日受理)